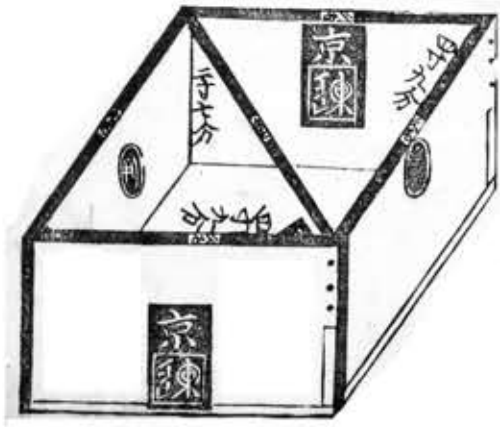


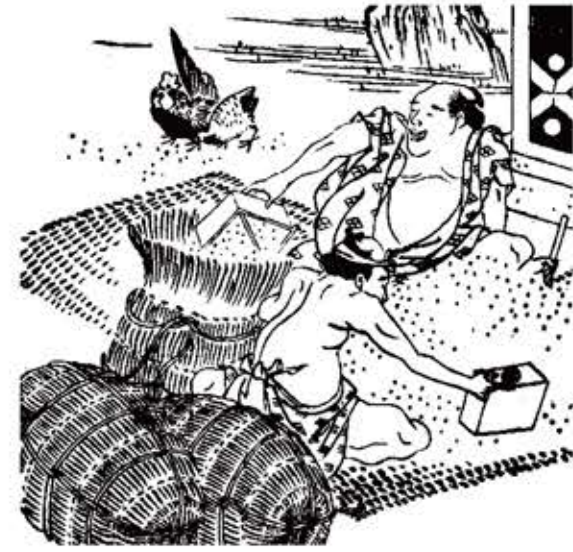
量  
(容積)

容積・体積は「升(升)」で計ります。江戸時代には地方により様々な升が存在しましたが、幕府は京升を公定升として採用し、西日本では京の福井家を升座として管轄させました。寛文9年(1669)に公定された京升は、内法が縦横とも曲尺で4寸9分(約14.8cm)四方、深さ2寸7分(約8.1cm)、すなわち容積64827立方分で1升とするものです。升には穀類用と液体用の2種類があり、前者には口辺に対角線状の鉄準(弦鉄)があります。

升 で は か る	容積(量)	1石	180.39リットル	1石=10斗
		1斗	18.039リットル	1斗=10升
		1升	1.8039リットル	1升=10合
		1合	180.39ミリリットル= cc	1合=10勺
		1勺	0.018039リットル	



京升(「塵劫記」)



「早引塵劫記」  
1升升で玄米を計り俵に入れる。  
米俵1俵は3.5~4斗前後が多く1斗の重さは15kg程度である。

「駄」とは「一駄」とは牛馬一頭に負わせる荷物の量で、概略の量をさして助数詞的に用います。江戸時代の伝馬では、一駄は、荷物運び専門の本馬(ほんま)が36貫(約135キログラム)、ひと一人を乗せる軽尻(からじり)が16貫(約60キログラム)と定められていました。そのほかでは商品により牛馬の駄鞍(だあん)に付けられる量が違うため、一駄といっても量は異なります。たとえば酒は3斗5升(63リットル)入りの樽二つで一駄、醤油は、8升入8樽を一駄としています。

衡  
(重さ)

重さは「秤(はかり)」で計ります。竿秤は計りたい物を皿にのせて、おもりの分銅を左右に動かしてつり合わせ、分銅がある場所の目盛で重さを知るもので、重量で代価の変わる商業においてよく使われました。貨幣などは計る両替商は計りたい物を片方の皿に乗せ、てこの原理を利用しておなじ重さのおもりである分銅とつりあわせて重さを知る天秤を用いました。幕府は京都の神家に西日本の秤の管轄権を認めて、その統制を行わせました。

1匁はもともと唐の開元通宝の銭1文の重さで、匁は泉(=錢)の草書体です。薬種・茶などは取引慣習により1斤の匁数が異なります。

秤 で は か る	重さ(衡)	1貫	3.75kg	1貫=1000匁
		1斤	600g	1斤=160匁
		1匁(目)	3.75g	1匁=10分
		1分(ふん)	0.375g	1分=10厘
		1厘	37.5mg	



竿秤で薪の重さを計る(「増補必用広益改算記大成」)



竿秤で繰り綿の重さを計る(「改算日用車」)



「算学調法塵劫記」 金の両替